

日本記者クラブ（11年5月31日）

「大使に聞く―南アフリカ」

日本記者クラブの中井専務理事から昨年ご招待をいただき、少し時間がかかりましたが、本日、南アフリカについてお話する機会をいただき、大変光栄に存じております。

私は、2008年11月半ばに南アフリカに着任しましたので、ちょうど2年半勤務していることとなります。南アに加え、ナミビア、スワジランドとレソトの3カ国を兼轄しており、それぞれ手間も暇もかかる国であります。本日は、南アフリカとアフリカ全体についてお話したいと思います。

アフリカは、東西南北がそれぞれ約8千キロという巨大な大陸でありながら、人口は約10億人と、インドよりも少ないくらいです。この大陸の南端に、アフリカで初めて工業化に成功した国があり、これが南アフリカです。南アは、アフリカ全体と比べ、面積で4%、人口で5%、GDPで23%（09年、Wikipedia、アフリカは世界の2.3%）、そして経済の実力をよりよく表す電力の生産量では45%を占める国です。アジア大陸の極東では日本、アフリカ大陸の極南では南アがそれぞれ最初に工業化したと言え、南アに対する親しみが少し増すでしょうか。大きな違いは、日本は島国、南アは陸続きという点にあり、この違いを反映して南アには人の流入が続いております。

南アは、昨年サッカーW杯を開催し、東日本大震災の後には45名からなるレスキューSAという救助チームを被災地に派遣し、今年末には気候変動に関するCOP17会合をホストします。これらのことから、日本の中で南アに対する関心が高まりつつあると感じています。国際場裏では、南アは、いわゆる新興国の一つとして、最初からG20の一員であり、今年の初めには、BRICSの正式加盟国になって注目されました。国際政治の面で見ると、南アは、来年末まで安保理非常任理事国であり、また、アフリカ大陸で生じるいくつもの内紛について、アフリカ連合の大国の一つとして、スーダン、リビア、コートジボワール、ジンバブエ、マダガスカル等における内紛の解決支援のため、大統領主導で調停活動を行っています。安保理改革については、南アは、2005年時点では静かな対応をしていましたが、昨年来、「アフリカが求める常任理事国2議席の内、1議席を占める資格がある」と公言するようになってきました。このような南アは、我が国外交上、重要なパートナーと位置づけられており、昨年岡田外務大臣(当時)が南アを訪問した際、両国の関係は、「戦略的協力関係」に格上げされました。この結果、私の大使館では、業務量が非常に増えています。

ここで、南アを理解するための4つのキーワードをご紹介します。

第一に、先進国兼途上国であるということです。例えば、1967年に世界で初めて心臓移植

手術を成功させており、濃縮ウラン型の原爆を 6 個半製造し、これを廃棄(91 年)しております。空港や高速道路網は立派に整備されており、鉄道と電力網は、老朽化しているとはいえ機能しており、サービス産業が発達した先進国型経済があると言えます。他方で、十分な教育を受けていない失業中の貧困黒人が多く、旧黒人居住区における彼らの生活改善は、少しずつしか進まないという現実があります。ジニ係数は、0.70 (OECD 08 年)という、びっくりするほど高い数値となっており、これは 1994 年における体制転換後むしろ上昇しているという問題があります。失業率は 24%ですが、潜在失業率は 36%であると言われています。エイズ罹患率は下がりつつありますが、10%程度とされています。最大の問題は、アパルトヘイト時代に行われた「バンツー教育」の負の遺産を抱えていることだと思います。アパルトヘイトの間、ほとんどの黒人は、読み書きしか教えてもらえず、理科と算数を学ぶことができませんでした。この愚民化政策の結果、論理的思考能力が発達しなかったと言えます。なお、南アの治安が悪いことが日本では広く知られているように思われますが、治安が悪いこと自体は、簡単に言えば、ジニ係数が高いことの反映だと思っています。

第二に、話し合いで政治社会革命を実現した、人類史上、稀有な国であるということです。デクラーク元大統領が 1990 年にマンデラさんを無条件で釈放し、1994 年に初めて民主的な選挙が行われてマンデラさんが大統領に就任しました。話し合いで体制転換が実現したのです。これは、南アの誇りであり、国際場裏における南アのモラル・パワーの源泉となっています。1994 年以降、反アパルトヘイト闘争を主導してきた ANC(アフリカ国民会議)が政府与党として政治の中核を担っており、政治体制は安定しています。報道の自由も保証されています。1994 年の体制転換後、オセロ・ゲームのように、立法府と行政府に続き司法府も、段々「白から黒」に変わっていきましたが、今日でもそれほど変わっていないのが経済です。経済では、マレーシアのブミプトラ政策にも倣って、BEE という黒人優遇策がとられており、鉱山企業の持分比率の規制や一般企業の政府調達における競争条件で黒人優遇実績が評価される制度が導入されています。その結果、黒人の中に大富豪や「ブラック・ダイヤモンド」といわれる中産階級の人達が育ってきていますが、同時に、鉱物資源行政における腐敗・汚職や、契約実行能力の無い企業の受注によって行政サービスが滞るという現象も生じています。

第 3 に、サブサハラのエコノミクスヘゲモンであるということです。電力生産量は、関西電力位ですが、先ほど述べたとおり、全アフリカの 45%を発電しています。南ア経済の強みは、ダイヤ、金、プラチナ、クローム、マンガン、石炭等の鉱物資源にあると思われがちです。歴史的には間違いなくそうであり、今日でもこれらは重要産業ではありますが、今や、南ア経済の強みは、サービス産業にあります。金融、会計、弁護士、通信、医療、卸と小売業で、サブサハラ諸国を席巻しています。サービス産業の比較優位が高いので、南アは地域

統合を進めることに熱心です。古くは、1910年に、世界最古の関税同盟である南部アフリカ関税同盟(SACU)を創設(南ア、ボツワナ、ナミビア、スワジランド、レソト)しており、最近では、南部アフリカ開発共同体(SADC)14カ国の経済協力推進に熱心です。AU/NEPADでは、地域インフラ開発に意欲的であり、特に南北回廊を推進しようとしています。南アの工業に目を転じますと、アパルトヘイト時代に世界から制裁を受けていましたので、自ら生産することに努力した結果、南アの中で鉄鋼業、重化学工業、自動車製造業、武器製造業、食品加工業等の工業が発達しています。

第四のキーワードは、新興国であるということです。これについては冒頭に申し上げましたが、3点だけ補足します。一つは、IMF専務理事の選任について、BRICSは、途上国出身者が就任すべきだという声を最近表明しました。これは、世界ガバナンスの構造的変化を予兆させる出来事だと思います。二つ目は、気候変動交渉についてですが、BASIC(ブラジル、南ア、インド、中国)と呼ばれる枠組みがあります。2009年末に、コペンハーゲンでのCOP15における最終局面で宣言を取りまとめたのは、オバマ大統領とBASICの首脳達でした。これは、色々と考えさせられる出来事でした。三つ目は、IBSA(インド、ブラジル、南ア)という枠組みもあるということです。こちらの枠組みでは、首脳レベルで既に4回会合しており、16の委員会を通じて中身のある協力関係を深めています。

キーワードを繰り返して申し上げますと、先進国兼途上国、話し合いで政治社旗革命実現、サブサハラの経済ヘゲモン、新興国であります。

次に、二国間関係についてお話しします。日本政府がアフリカ南部に初めて関心を持つのは、1879年にズールー族が英国軍の正規部隊を殲滅した時です。帝国陸軍はこれを不思議に思い、1年かけて調査報告を取りまとめています。19世紀末には、日本の商人(古谷駒吉)がケープタウンで貿易商店を開業し、事業が繁栄したという記録が残っています。この方の推挙を受ける形で、1910年に、日本政府はケープタウンに名誉領事(ジュリアス・ジェッペ)を置き、同氏は、アフリカ大陸で初めて日本政府を代表する人物となりました。少し、余談になりますが昨年は、日本政府がアフリカに拠点設けた年から丁度100年に当たる年でありましたので、日本のサッカー代表チームもおそらく出場できるであろうと予想し、日南ア公的関係樹立100周年を記念して、100周年交流年の各種文化事業が日本と南アの双方で行われました。

アパルトヘイト時代末期まで時計を進めると、経済制裁に苦しむ南アは、対日貿易を増やし、日本は最大貿易相手国になって世界から響きを買ったことがありました。この間、南アの白人たちの間では、日本文化への関心が高まり、活け花、盆栽、武術全般、鯉養殖

等が盛んになり、これは今日も続いています。しかし、黒人について言えば、彼らが関心を示すのは空手、合気道等の武術に留まっているように思われます。南アの体制転換を控え、新生南アを支援することが世界レベルの課題となっていく中で、日本は1992年に総領事館を大使館に格上げし、正式な外交関係を樹立しました。

今日でも両国を結ぶ最も強い絆は、経済関係であると思います。南アには103の日本企業が事務所を構えています。トヨタは22万台、ニッサンは6万台の製造能力を持つ工場を持っており、自動車関連では、ブリヂストン、NGKセラミックス、スパークプラグ他が直接投資を行っています。三菱商事は、フェロークロームの採掘と精錬事業を直営しています。コマツ、日立、東芝は、それぞれ大型の事業を展開しております。これらの日本企業は、南アで約15万人の雇用を創出していると言われております。最近では、NTTがディメンションデータというIT企業を約3000億円で買収し、関西ペイントが地元のペイント会社をTOBで買収して注目を集めました。他方、南アに居住している日本人の総数をみると、約1400人に過ぎません。これは、30-50万人といわれる中国人と比べると、随分少ない数字です。

国民同士の関係ということ言えば、残念ながらまだまだ希薄であると言わざるをえません。あまりにもお互いを知らないという関係にあると思います。南ア側では、日本は広島・長崎の後、突然奇跡的に発展した国と思われているようです。ごく一部のエリートを除き、明治維新やアヘン戦争、セポイの乱を全く知らないのです。メンタリティは、白人社会のみならず、黒人とカラードの社会も、欧州中心主義です。こういう状況を正していく上で重要なものは、ソフトパワーであると思います。昨年、サッカーW杯で、日本チームのプレーがとても綺麗なため、日本が気に入ったと言ってくれた人が何人もいました。レスキューSAが宮城県で活躍したことも日本でインパクトがあったと思います。今、アフリカ・ドラムの人達が被災地の避難所や小中学校を社会奉仕で回っていますが、こういう活動こそが、両国間の相互理解を本当に深めていくのだと考えて、私も在京のグローバル大使も一生懸命彼らを激励しております。

政治面をみると、関係は良好なのですが、交流はもっと強化されていくべきだと考えております。昨年、岡田外相(当時)が、現職外相としては久しぶりに南アを訪問され、とても盛り上がりました。明日には、南アのヌコアナ＝マシャバネ国際関係・協力大臣がMDGフォローアップ閣僚会合出席のために訪日され、この機会を捉えて、両国政府間で第11回目のパートナーシップ・フォーラムが開催されます。南アからは、関係省庁の幹部に加え、電力公社(エスコム)、貨物鉄道港湾公社(トランズネット)、南部開発銀行、土地銀行等の公的機関の幹部も来訪します。日本に対する関心が少し高まってきたことの反映であると思われます。なお、議会交流と議員交流については、従来からそれなりに行われてきていま

すが、昨年 9 月に衆議院議院運営委員会一行が松本議運委員長に率いられて南ア訪問されて以来、随分活性化してきたと言えます。

日本から見ると、アフリカは遠いところにあるフロンティアです。私は、少し生意気だなと思いつつ、「日本のような国はフロンティアを攻め続けないと衰退する」と言い続けてきています。昨年初め、東洋経済の新春号は、アフリカ特集でした。私は、驚くと共に、大変嬉しく思いました。昨年半ばには、マッキンジー社が「動き出したライオン群」というアフリカ報告書を発表しています。アフリカの全ての国ではないが、多くの国で、直接投資と海外送金の受け入れで消費が拡大し、持続的成長過程に入っているという内容です。日本としても、アフリカは、資源獲得の場所としてだけでなく、ビジネス拡大の市場であると考える必要があると思っています。

ご清聴ありがとうございます。